



ストックで、負けん気が強いという短距離女子。400mの副主将・松本扶弥選手がけん引する



短距離男子に所属する近藤選手は100mと110mハードルの種目で大会に挑む。他選手と刺激し合い、切磋琢磨していると話す



フィールドには、槍投げ・砲丸投げ・円盤投げ・走り高跳びの種目がある

陸上とは自身の限界に挑戦する競技。学生たちには、何事にも限界を超えようと挑戦していったほしい



笑顔を見せる陸上競技部。練習では互いに指摘し合い緊張した空気が流れる場面もあるが、日常生活では学年に関係なく交流して絆を育んでいる

【巻頭特集】

100mハードル女子で全国連覇！
愛知教育大学 陸上競技部

限界を超えて、
勝利へ駆け抜ける！

昨年9月、大学陸上競技部の頂点を決める日本学生陸上競技対校選手権大会が開催。100mハードル女子の種目において愛知教育大学 陸上競技部の小林紗矢香選手が全国連覇を成し遂げた。3連覇をかけた今大会まで、残り2カ月程度。1秒でもタイムを縮めるべく、選手たちは限界に挑んでいる。



中長距離の練習では400mのトラックを30周、40周する日もある。スタートから3割走った時点と、7割走った時点がもっとも苦しいという。また、競技中に周囲の声援を受けると苦しい時でも力が湧いてくるようだ

フィールドの走り高跳びは、バーが数センチ上がっただけで難易度が格段に上がる



地元大学の強豪・陸上競技部
全国連覇の選手が誕生

13秒50。一昨年、100mハードル女子で小林紗矢香選手が初の全国優勝に輝いた時の記録である。「前に誰も見えなかった。横に目をやったら隣レーンで走る選手のつま先が見えたんです。走りながら『勝った』と確信しました」と振り返る。会場の電光掲示板に順位が表示された瞬間、仲間たちは涙を流して喜んだ。愛知教育大学の陸上競技部は、約70年以上の歴史がある強豪で、推薦学生を含む約100人が所属している。種目は短距離男女や、中長距離男女をはじめ、砲丸投げ・円盤投げ

といったフィールド競技。毎年5月の東海学生陸上競技対校選手権大会と、9月の日本学生陸上競技対校選手権大会（以下、インカレ）出場を目指す。練習に励んでいる。陸上競技は種目により、練習方法やチームの雰囲気も異なるという。短距離走は自主性を重視。タイムを0・1秒でも縮めるためには、自身に對する厳しさを要する。逆境に屈しない精神力が問われるのは、中長距離だ。周囲の声援を力に変え、1万mを走りぬぐために粘り強さや持続力を鍛える。高跳びや槍投げといった多彩な種目があるフィールドは、力学を踏まえた練習が必須。より高く跳び、より遠くへ飛ぶためには、

身体構造の知識も必要だ。「それぞれの種目で選手の特徴がありますが、共通するのは闘争心。『誰にも負けたくない』という熱意が重要です」と小林選手は力を込める。

自身と向き合い果敢に挑戦
好敵手と競った転機の大大会

昨年、小林選手が連覇を遂げた記録は13秒37。一昨年を上回るタイムであったが、準優勝・日本体育大学の選手とは僅差の0・02秒差だった。もともと100mの選手だった小林選手は、高校1年生の時にタイムが伸び悩み、100mハードルに挑戦。当初は練習を楽しむ程度であったが、

記録が伸びると種目を転向した。「私は身長155・2センチで小柄だから、ハードルは不利なんです。でも心機一転で挑戦したら楽しくて。するとタイムが『一気に伸びたんです』と笑顔を見せる。次第に頭角を現し、高校3年生にはインターハイで入賞。愛知教育大学への進学後、1年生でU20日本陸上競技選手権大会の優勝に輝いた。「ライバルである中央大学のヘンブリル恵選手に勝てたことが転機となりました。自分に自信が付き、その時から勝利が当然になった。私にとって忘れられない大会です」と当時を話

す。その後、大学3年生で副主将に就任。部をけん引する存在となっていた。今年9月にもインカレが開催される。小林選手にとっては3連覇をかけた大会だが、後輩の記録にも注目しているという。「後輩たちには私を越えてほしい。まとまりがあつて、連携がとれた良い年代だと思います」と、下級生を見つめながらほほえんだ。

人間としても大きく成長
可能性を信じて走る

練習は選手によって異なる。各種目にチームを務める選手がおり、独

自のアイデアや選手の意見を参考に練習メニューを考案。短距離は用意された練習メニューから選手が取捨選択し、中長距離では全員で1万2000mをひたすら走る時もある。大会が近づくにつれ、部の士気は高まる。現在、主将を務める3年生の近藤佑樹選手は「先輩は実力ある人ばかりなので、引退後は主戦力が抜けてしまいます。でも、絶対に弱いチームにはなりません。陸上は個人競技ですが、大切なのはチームワーク。自分たちが先輩の穴を埋め、さらに強いチームになりたい」と言

葉に力を込める。卒業後は競技を離れる部員もいれば、指導者や実業団の道に進む選手もいる。顧問の鈴木英樹教授は「まだまだ全員が発展途上。あらゆる進路を選択する中で、自分の可能性を信じてほしい。陸上とは自身の限界に挑戦する競技。学生たちには、何事にも限界を超えようと挑戦していったほしいんです」と願う。記録に涙をのむ時があれば、乗り越えて自信を手に入れることもある。自分の限界と向き合いながら、あきらめるものと闘志を燃やし、選手たちはスタートラインに立つ。



左から顧問・鈴木英樹教授、主将・近藤佑樹選手、小林紗矢香選手、副主将・松本扶弥選手、主務・森下諒選手